

カナダの思い出(2)

及川 洋

1. 「活字の英語」と「音の英語」

滞在中、なんと言っても一番苦労したのが言葉の問題である。海外渡航は短期間ではあるが既に7回も経験していたし、今回の渡航にあたっては、週2回ではあるが約1年間、40万円も掛けて英会話教室にも通った。また、当大学にオーストラリアから来ている留学生(女性)にも、週1度自宅に来てもらい、家族で会話の訓練もした。これにも結構経費をつぎ込んだ。彼女の名前はSyaron Crane(シャロン・クレーン)というが、土木工事などでよく使うクレーン(起重機)という言葉が、もともとは「クレーン=鶴」という意味の言葉であることもこの時始めて知った。もちろん、これでスムーズに会話が出来るようになったわけではないが、まあまあ何とかなるだろうというレベルまでは行ったと思っていた。しかし、“世間はそう甘くはない”とはよく言ったもので、その格言を骨身にしみて経験する羽目になった。

先ず最初に汗をびしょりかいたのが空港に降りたときだ。カナダでは3ヶ月以上滞在する場合にはビザが必要で、文部省からの派遣といえども、我々が貰えるのは就労ビザ(いわゆるWorking Visa)である。

すなわち、植民者として扱われる。そのため、入国に当たっては空港内にある移民局に行き、入国審査を受けた上で必要書類にスタンプを貰わなければならない。これがないと3ヶ月以上滞在出来ないし、子供達を現地の学校に入れることも出来ない。ずいぶん色々なことを聞かれた記憶があるが、何を聞かれたのか未だに覚えていない。審査官は一見してすぐ分かる中国系カナダ人で、途中からずいぶんゆっくり話してくれていたようだが、それでも殆ど聞き取れなかった。この間、約20~30分、汗びしょりかきながら何とかクリアしたものの、後ろのイスには家内と子供2人が不安そうに座っていたのが今でも印象に残っている。

差し当たりすぐ使うと思われた医薬品等の日常必需品をぎっしり詰め込んだリックサックを背中に背負い、ベルトコンベアーから出てきた重量制限ぎりぎりのスーツケースを両手に引きずって、親子4人、空港の外に出るまでの姿は、入国審査時の言葉のショックが尾を引いて、それは惨めであったことを今でも時折夢に見る。

読んだり書いたりする「活字の英語」(日本式受験英語)は何とかなるにしても、聞いたり話したりする「音の英語」(日常

生活英語)になると、よっぽど訓練して行かないと辛い思いをする。そこには、英会話テキストやカセットテープには無いような、わけの分からない表現が頻繁に出てくる。もちろん、方言等も出てきているであろうから、致し方ないことではあろうが、実は小生、それらの表現の大半をちゃんと習っていた。ただ、日本にいる外国人英会話教師が日本人に分かりやすく教える会話のスピードと、現地の人が喋るスピードは全く違う。日本人向けに作られたカセットテープも全く同じである。そのため、現地での英語は殆ど理解できない。帰る頃にはほんの少しは慣れるものの、それまでは本当に悲惨な思いをする。「活字の英語」も必要とは思われるが、それ以上に「音の英語」の重要性を痛感した次第である。

2. たばこ

次に苦労したのがタバコの問題である。カナダでもタバコを吸う人が多いためか、結構多くの種類のタバコがあった。一つのタバコにも、ストロング、ノーマル、ライト、スーパーライト、エキストラライト、マイルド、スーパーマイルド、エキストラマイルドなど、その品数は非常に多い。しかし、タバコの自動販売機は無いため、それを買うためにはやはり会話をしなければならないのも苦痛ではあったが、それより大きな苦痛は、大半の人がタバコの臭いを極端に嫌っていることである。一部の例外はあったが、どんな建物の中も一切禁煙で、

タバコの臭いを付けていると面と向かって嫌な顔をされる。そのため、タバコは外で吸うことになるが、体に付いたタバコの臭いを消すため、20~30分、外をうろろしななければならない。小生のようなヘビースモーカーは、20~30分もすれば又吸いたくなるもので、研究室の入り口で再びUターンし、また流浪の旅に出なければならない。おかげで、広大なキャンパスも隅から隅まで知り尽くしたが、雨の日などは悲惨であった。何をしにカナダまで来たのかと考える毎日でもあった。ただ、小生ほどヘビースモーカーではないが、イランから来ていた大学院生もタバコを吸うため、僅かではあるが互いに悲惨さを分かち合えた。また、彼がタバコを吸うために外へ出て行くときには、必ず小生の部屋の前でウインクして行くなど、タバコの縁で出来た良い思い出も少なくない。しかし、禁煙国でタバコを吸うことは本当に苦労する。

次回(最終回)へ続く。

(秋田大学 土木環境工学科)

